



## ■主な内容

- ・第38回海外交流の会報告  
スウェーデンにおける建築界の女性—私の仕事・暮らし・住まい—
- ・特集：持続可能な環境を求めて  
—世田谷 松陰村を訪ねて  
—水辺から考えるアーバンエコ  
—ピオアイランドネットワーク  
—越後妻有大地の芸術祭・3年大祭
- ・法末（長岡市小国町）との1年
- ・この指とまれ報告「日下部記念病院見学会」



中越地震被災集落・  
法末「みのりの茶会」風景



稲刈りの終わった法末  
(撮影:安武敦子)

## 第38回海外交流の会報告

### スウェーデンにおける建築界の女性 ——私の仕事・暮らし・住まい——

古居 みつ子

秋晴れの10月29日（日）、スウェーデン在住のお二人の女性建築家、シェスティン・シェネッケル氏、イングラ・ブロンベリー氏をお招きして（通訳：馬場裕美氏）第38回海外交流の会が開催されました。

王立工科大学建築学科で学ばれたお二人は、卒業後も研究グループBIG（スウェーデン語で「コミュニティに住む」という意味の名称の頭文字）のメンバーとして共に活動してこられた（現在進行形、言わば同士。男女平等の国と言われるスウェーデンの建築界での女性の状況にも触れながら、お二人の仕事のこと、暮らし、住まいについてお話いただきました。

#### お二人のこれまでの人生、建築を学ばれた経緯

学生時代の60年代は、建築学科クラス30人の内3割が女性に過ぎなかったが、現在は建築、土木工学の学生の半数が女性である。しかし、建設関係、コンサルタント等の職業世界は、やはりまだ男性の多い職種とのこと（若い世代では改善されつつある）。スウェーデンでも「まだそうなのか」と思う反面、同時代の日本では3割は「あり得なかった。10年後かな。」と思いつつ、紹介された40年前のクラス写真を拝見。

リタイア後の現在もお二人は、BIGの活動に、コウハウジング\*1の建設に、趣味にと多彩な活動に取り組まれている。シェスティン氏は13年前からコレクティブハウス「フェルドクネッペン」に居住しチェアマン（運営委員長？）をされている。イングラ氏は当初プロジェクトには参加していなかったが、現在はコモンミール\*2に参加されているとのこと。

## BIGの活動の紹介と現在の住まい

BIGは30年前に始まった活動で、当初は10人の女性でスタートしたが現在は6人。コレクティブハウスを現実化するために、これまでに5冊の本を発行。この国には48のコレクティブハウスが実現しているが、その半分に実現のきっかけを与えた冊子「the small collective house —a model to be put into practice」も紹介されました。この考え方は普遍的なものであり、普及のための諸活動に取り組んでいると語られました。



講師、通訳の方々を囲んで

#### 「フェルドクネッペン」シェスティン氏在住について

1987年に計画がスタートし、1993年に完成した「セカンドライフ」のためのコレクティブハウス。43戸、40～97歳の53人が居住。共用のキッチン、ダイニングルーム、リビングルーム、ランドリー等のコモンスペースが充実。48のコレクティブハウスの内、8ヶ所がこのような「セカンドライフ」のためのハウスとのこと。

中高齢者向けの集合住宅は福祉的要素が強くなってしまいう中で、「セカンドライフ」のためのコレクティブハウスは、住からの解決策として興味深いプロジェクトです。

その他BIGだけではなく建築、建設業界での他の女性組織の紹介と幅広いお話が続き、大変有意義なひとときでした。

編集部注）\*1コウハウジング：「コレクティブハウジング」と同義  
\*2コモンミール：食の共同運営

## 第39回 海外交流の会のお知らせ

### 「陶器の街・スウェーデン・グスタブスベリイの歴史・保存・再生」

講師 小川信子氏（本会会長）、藤井恵美氏（陶芸家）

日時 2006年12月9日（土）14：00～16：00（開場13：30）

場所 スウェーデン大使館 オーディトリウム

（東京都港区六本木1-10-3-100 南北線六本木一丁目駅下車徒歩5分または日比谷線神谷町駅下車徒歩8分）

同時開催：藤井恵美 在瑞40年展  
（於、スウェーデン大使館 ギャラリー）

## 世田谷・松陰村を訪ねて

環境をどのように生かすのか、どのように地域に開くのか、このテーマを考えるために、2006年秋、世田谷の松陰神社近くに位置する「松陰村」を訪ねた。松陰村とは、地主さんの相続をきっかけに始まった2つのプロジェクト「松陰 commons」（シェアードハウス）と「樺ハウス」（コーポラティブハウス）そして大家さんのご自宅を含んだこのエリアの愛称である。



松陰村の配置

### ◇250年の樺の巨木を生かす

「松陰 commons」は150年余前に建てられた民家である。大家さんはここで生まれ、育った。家族が多くなったので隣接地に新しい家を立てて、移り住み、空いた旧家をどうしたものか考えていた。納税のために現在の「樺ハウス」の建つ場所は処分することにしたのだが、ここに立つ樹齢250年の樺を見上げ、大いに悩んだ。「緑」を生かしたいという思いに家族も大賛成。またその時、さまざまな出会いがあって、環境共生をテーマにプロポーザル方式で集合住宅の計画案を出してもらった。

決定案は、250年の記憶、巨木の樺を移植し、コーポラティブ「樺ハウス」のシンボルとする大事業を含むものだった。

一般的開発やミニ宅地化だと、当然のように伐採されてしまう運命の巨木が活かされるとあって、移植の日、プロジェクトのメンバーもご近所の人も見守った。18m先に準備された大きな穴に向かって、10人もの職人が一糸乱れることなく作業をした。250年間同じ場所にあった樺がクレーンで持ち上げられた時には、見守る人たちから歓声が上がったという。

### ◇共有できる大切なものは何か

木を切らないでというテーマは環境共生というからには当然と思ったが、実は樺の巨木を移植した映像を拝見して感動に変わった。

よくがんばったねー！と樺への敬意と、移植の高額経費を分担した人々の努力に敬意を表す。同時に、この樺を守ることで、困難なプロジェクトを方向づけ、コミュニティを持続させているとを感じる。共有できる大事なものの、持続可能な方法を見出す大切さを教えられた。

### ◇人の連携・地場それぞれの何かを探す

松陰村は樺、緑。では、UIFAが支援に入っている法末は何だろうと話が飛んで「食」のすばらしさを感じていたメンバーから「米・水」と意見がでた。地場それぞれ、守りたい、共有したい何かを探すが住まい、まちづくりの大切なポイントであることを学ぶ。そして「人」。樺を残そうとした人。持続可能を考える人。「緑」の保全是手がかかるが、その緑にかかわることから生まれる志向は、どの地域にあってもさわやかである。

### ◇解決策には皆で知恵をだす

いま、松陰村では、シボルの樺の新しい枝も伸びて、屋上庭園や緑化も成長し、緑に覆われ、ビオトープにはめだかが泳いでいる。

悩みもあって、育った藤の木が塩ビの雨水管に抱きついて圧迫しているらしいが、今みんなで解決策を考えているという。樹木のおかげで蚊も発生するが、蚊も住めないところもあるという怖い話からす



樺ハウスの屋上からビオトープを眺める

れば、幸せというものだろう。夏の室内温度は樹木と風の道を生かして2、3度低くなるらしい。

### ◇管理力の持続・自然との折り合い

環境を壊さないで松陰村を生き生きと運営していくには、管理力が求められるだろう。「緑化」だ「ビオトープ」だと簡単に言うが持続するには管理力だ。法末などの里山が手をかけて循環されているように、都市も自然と人の営みと、折り合いをつけて、地球環境にかかわることが重要だ。

松陰村は、既設の「松陰 commons」の接道のために設けた位置指定道路が路地空間となって、これを軸にして、既設の緑を生かし、塀を設けずに、それぞれの庭が一体化している。境界が見えないことが近隣の関係性を豊かにして、人の気持ちをもつないでいる。管理力がなくこうした空間はなかなか維持できないものだが、実に気持ちのいい空間となっている。

### ◇地域に開く

「樺ハウス」は2003年10月に完成。それぞれ好みの内装で15世帯が暮らしている。「樺ハウス」の中庭は、路地空間を隔てて「松陰 commons」と向き合っており、ご近所付き合いの舞台、子どもの遊び空間になっている。バーベキュー、落ち葉もみんなが掃いて焼き芋なんかをするそうだ。



樺を取り囲む松陰村

さて「松陰 commons」は、築150年の民家に7つの個室が増築されて、鈴木さん一家が住んでいた。2001年6月から02年3月まで9ヶ月ほど、その古民家を何とか生かして使っていけないかと、多くの知恵が結集し、そして「松陰 commons」が誕生した。

現在、世代も職業もくらしのスピードも異なる7人が7つの個室に住んで、母屋の縁側と座敷部分は共通として地域に開かれている。共通は多くの人に慕われ、さまざまな展開があり、人気スポットとなった。

### ◇真の豊かさをみつけた

実は、「松陰 commons」は入居前には有志が集まって母屋の土壁の修復、大掛かりな清掃、古い家財道具の整理や処分もした。障子の張り替えは季節の仕事となった。快適に活用するには古い建物の管理は想像以上大変。修理をしながら使っている。コモンスペースである座敷のタタミも傷み、タタミ基金を募ったりもしている。庭の手入れはなかなか手が回らない。季節折々、助っ人、大家さん、樺ハウスに呼びかけて庭の手入れをする。

そこには新たな人の出会いもある。住み手たちも程よい距離感を保ちつつコモンの暖かさを感じている。ここには、ワンルームマンションなどでは到底味わえない豊かさがある。

### ◇生かし続けよう「えんがわ」の価値

「松陰 commons」はNPO CHCの運営だ。5年を経て、今後はどのように展開するのだろうか。NPOと「松陰 commons」の住人、大家さん、「樺ハウス」の皆さんの連携と成熟に期待したい。軒と縁側という日本家屋のもつ豊かな空間手法と環境共生型の集合住宅のコラボレーションは説得力があった。いずれオトヅレルであろう古民家再生プロジェクトでも、松陰村の「えんがわ」といえるコモンスペースを生かしたい。



鈴木邸にて取材

さまざまな感想を語り合った取材見学であった。

<トーク：広報委員（井出・石川・中野・須永・渡邊）・文責：渡邊喜代美 スケッチ：中野晶子・写真：須永倅子>

水辺から考えるアーバンエコ

北島 三和子

帰国後の衝撃から

1993年以来、東京天王洲の運河に囲まれた古い倉庫群に出会い、その空間整備の仕事を行っています。その当時は都市の何処も用を失くした運河や河川は下水道代わりか又暗渠になるしか無く、ほとんどの建造物は運河・河川に背を向けていました。



運河に囲まれた天王洲エリア (ゲーグルアース)

さて古い話になりますが、パスポート4冊に渡り大小の国々を巡り、様々な国々での生活・仕事の経験を経て日本に帰国した日、高速道路からの風景は木々が見られず、ポリバケツから屋根に至るまでプラスチック製品のあの青色に染まっていました。無計画街景色に怒りさえ覚え、ただ雪の日だけは白一色になりホッとしたことを思い出します。



倉庫を改装したレストラン (撮影：井出)

どうしてこんなに騒音、騒臭、騒色、騒々しい汚い凸凹街に鈍感になってしまったのか。一級建築士とはいえ、実はビルダー、ファッションデザイナー、舞台装置家、ビックリ業師有りの無法者もいる。排気ガスで瀕死重傷の樹木の下、朝日も夕日の美しさも隠された生活環境に慣らされた大都会の暮らし。そんなウンザリする中、役目を終えた倉庫を訪問し“こんな美しい水際があるじゃない!”と思う一角を発見。人が集まり語り合

える場所にしたいと直感しました。その後、運河に面する周囲の企業と「美しい運河を考える会」を活動させたり、“東京もこんな風景なんだ”と知ることによって生活者達が環境やスペースの大切さを考える『気づき』になるのでは?と水辺ウォッチングイベントとした「東京国際カヌーマラソン」を提唱したりしています。水上マラソンを通して水面、陸、空、様々な角度から東京の風景を見せてくれるでしょう。時にはレッドカードの風景をも見せつけるかもしれません。

与えられた課題

個の美しさも必要ですが、マスで感じる風景こそ都会の環境空間には大切だと思っています。帰国後、新構築物は造らないと決心し、私に与えられた課題は『眠っている、汚くなっている場所に付加価値をつけ美しいスペースに置き返る仕事がある』と感じていました。水辺との出会いは偶然でしたが、持続可能な美しい水風景、水面の目線からの都市環境、景観、水問題、人々の心の楽しさを創るなど、目の前にある課題は山積です。

新しく勝手に箱物を造り、儲ける経済効率のみの価値観しか持たない民族志向には環境や空間が何の為に必要かを考える余裕さえも許されなかったのでしょうか。形あるもの、時間、空間を脅かす建造物を構築できる建築関連職業人の責任は重い。西洋では「生」を託す人々の為に医者や身体を、弁護士は社会から、建築家は空間で守る **Professional People** として理解も尊敬もされていると聞きます。私は「環境」とは言葉だけが飛び交うことではなく毎日の普通の暮らし方が肝心であり、そこから環境のこと地球のことを大事に想う感性が生まれると信じています。現在、自然に学び潮を感じる風景、小網代タイドパークプロジェクトを模索中。もし其々にご関心お寄せ頂けたら幸いです。

バイオアイランドネットワーク

楊 英美 Yang Yingmei

島に出会う

島と聞いて、皆さんはどのようなイメージを浮かべるでしょうか。日本は300以上の島があり、島という環境に暮らす人がおり、日本そのものが島であると言えます。

私は東京芸大建築科を卒業後、熊本県天草市御所浦町という離島に移住した知り合いに呼ばれ、島を訪れました。御所浦町は不知火海の南東部に位置し、3つの島と15の無人島から成り、人口は3000人程度で主に鯛やフグの養殖と沿岸漁業、柑橘類の栽培に従事しています。島には高校が無く、子供たちは中学を卒業すると、ほとんどが離島します。

島民には当たり前の自然や、生活、伝統文化は、過疎化や環境破壊が進み失われてゆきます。外からの視点を持つ者として、そのかけがえのない美しさを見つめ直し、伝える機会を作りたいと思い、島の小中学生と一緒に、この4年間毎夏ワークショップを行ってきました。子ども達の成長を感じるとともに、島民の意識の変化も感じています。



熊本県天草市・御所浦島からの風景 島の生活に船は欠かせない

島のネットワーク

隔絶、環海、狭小という条件から、島同士に共通の課題が多いのですが、お互いにアイデアを共有し応用することは、まだまだ少ないように思います。今年からバイオアイランドネットワークという会を立ち上げ、島の課題や取り組みを共有できるように、シンポジウムや調査を行っています。島の人、都会の人、研究者などをつなげ、意見を出し合いながら、島で持続可能な暮らしを作っていくことを目指しています。

第1回シンポジウムでは「環境が島の経済を変える」というテーマで研究者の講演、島の人を交えたディスカッションができました。海外には島が環境エネルギーに先進的な取り組みをする、実験場になっているケースがいくつかあり、デンマークのサムソ島では島内自給の自然エネルギー100%が実現し、世界的にも注目されています。

自給・自足・自立

島の単位で考えることは、地球を考えることにとっても似ていて、限られた資源の中で生産、消費していくこと、汚染と浄化のサイクルであったり、島の外から入ってくるものと出て行くものが明白に見えたり、人は自然の中で生かされているということに認識します。それがゼロエミッション、エネルギー自給を実現していくための原動力となっていけば良いと思います。

この9月から実際に御所浦で、持続可能な暮らしとはどういうことなのか、島の人とともに考え、実践していく機会を得ています。今年3月に市町村合併があり、島ではない地域と一緒に、島にとってはますますつらい条件を与えられていますが、これを契機に、島民の一部は行政に依存しないで、どのように島の産業の活性化ができるか、真剣に取り組み始めました。私たちは島のニーズを把握し、世界中から技術や情報を集め、市場のニーズを島へ伝えていきます。経済をベースにおいた、持続可能な暮らしを提案して行くことができると考えています。ご意見をいただければ幸いです。

UIFA JAPON 事務局  
〒102-0083  
東京都千代田区麹町2-5-4  
第2押田ビル 榎生活構造研究所内  
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866  
E-mail: uifa@LIQL.CO.JP  
発行 2006年11月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS  
OF QUANTITY OF LIFE  
DAINI-OSHIDA BLDG.  
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU  
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861  
FAX :+81-3-5275-7866

■ 持続可能な環境を求めて③越後妻有 大地の芸術祭 3年大祭

2000年に新潟県が始めた里創(りそう)プランから始まったアートトリエンナーレ。写真や言葉による地域の魅力再発見事業、花いっぱい「みちにお」を中心とする総合的な景観形成事業、交流拠点整備事業などが柱となっている。2006年8月には、7万6000haの中にアート作品約600がちりばめられていた。

自然に寄り添う 須永 淑子



自然の中に、溶け込むかのように据えられているアート。作品たちの背景となっている自然や棚田、建物は、歴史と秩序の重みを感じさせる。棚田への水を溜めておく池では、瀬戸の土で焼かれたツボが水面にいくつも立っていた。「自然に寄り添うような作品に」と思いを語る作家の言葉が、営々と築き上げてきた農村文化に呼応していると思った。

大地の芸術祭を守るもの 石川和代



作品に泊まり見た夢を綴っていく「夢の家」の窓から見える田圃の美しさに息を飲み、稲の列の間を滑走路に見立てた明かりが点々と灯る作品に田圃が人の手のかかっている自然だと気づかされた。地元の方々の無数の地道な努力が作品も自然も守っている。まことに大地の芸術祭である。

6年目のクリスチャン・ラビ作「磐61」 寺本 晰子



鄙びた場所にまでたくさんの人々が、子連れの家族が、スタンブラリーのごとくかけめぐり、芸術に、里山の自然に親しんでおり、地域が息づいているようだった。芸術、自然の賜物か、生活者の知恵の賜物か混在する中で気にかかった作品で、大地の賜物に混じり、存在感を示し、棚田に同化していた「磐61」2000年クリスチャン・ラビ作があった。はぜ木?卒塔婆?住居の痕跡に立ちつくす人々です。

小白倉の村祭りと実行委員会とのコラボ 井出 幸子



肩を寄せ合う集落の小高い一角に社がある。社を取りまく杉に天蓋が張り渡され、明日の村祭りを待っている。キャンティレバーではり出す竹の張力・根本の綱と木組みの撓めた力強さ、ダイナミックな天蓋である。さらに神が宿る空間に演出が加わり、非日常空間に更なる弾み加わっている。実行委員会と村祭りとの力強いコラボが印象的だった。

■ 法末(長岡市小国町)との1年

災害復興見守りチーム 安武 敦子

中越地震から2年が経過しました。UIFA JAPON災害復興見守りチームが関わり始めてからも1年が経過しました。月に1~2回のペースで赴いています。当初は法末集落の魅力の再発見とその発信のために民家再発見プログラムと称してCDを作成しました。今年の夏から屋敷の配置図を採取しています。改めて図面におとすと新たな発見があります。今秋からは集落再生の3テーマ(定住・交流・産業)の1つ定住を担当し、いつまでも住み続けられる集落像を集落の方々と考えていく予定です。特に高齢化の問題、雪との生活の問題、さらに美しい景観づくりも集落の持続の上で課題としてあがっています。また10月14日には第3回目となるお茶会を開きました。好天に恵まれ、約30名の方がいらっしゃいました。集落からお茶碗の提供があったり、新しい顔ぶれもあって、おまけにテレビの取材があったり、来年は集落の方を巻き込む等、違ったスタイルに進化できればと考えています。東京ではセミナーを10月25日に開きました。長岡市復興管理監・渡辺奇氏を招き「中越地震の2年」というテーマで、渡辺氏自身が被災時にどういった行動を取ったのか、その後の仮設住宅建設の建設ポリシー等、大変興味深いお話をしました。お話しを通して自身が信念を持って仕事をしてらっしゃることが感じられ、若い同僚に対する「哲学をもって行動せよ」という言葉が印象に残りました。また法末ではへんなカフェと名付けた新しい拠点ができました。持ち主の方は小千谷に在住。お借りするにあたり丁寧に掃除してください、我々は工務店に依頼して最低限の修理を施し、11月5日にオープニングセレモニーを行いました。これから1年間お借りして、そこに常駐することで我々の活動を紹介したり、親交をより深めたりする場になればと考えられています。

■ <この指とまれ> —9月24日見学会—  
笛吹川の川縁に添う日下部記念病院(山梨市)

精神科・神経科の282床からなる病棟に、認知症のデイケア・ナイトケア、外来診療も加えたこの病院は、恵まれた環境をさらに増幅させるデザインが随所に盛り込まれ、やすらぎと暖かみを深く印象づけてくれた。「プライバシーと交流」つまり、個の確立と社会性の相反する両方のバランスを調整しなくてはならない精神に関わる患者への配慮は、4居室でも、8角形のプランから得られた「それぞれの窓辺」を配置し、心地よい空間を提供していた。心遣いや色使いは、作業療法室の木工、音楽、調理室などにも及び、笛吹川に向けた外部空間であるピロティは、川辺のすがすがしい風を受けながら、植栽の緑を愛でる事ができる。地盤への配慮、経済性、動線の工夫など、建築的な考察は入念かつ精密。この建物の設計者である柳澤夫妻の5年にわたる、みごとなコラボレーション。70号でさらに詳しく登場します。(中野 晶子)



役員会報告

第5回(8月29日)ニューズレター69号企画の報告。第38回、第39回海外交流の会について検討。各委員会の今年度活動方針の報告、意見交換。運営細則の変更を了承。IAWAへの出席要請について報告。第6回(9月21日)災害復興見守りチーム「みりの茶会」の準備、セミナー案内の報告。第38回海外交流の会の実施手順検討。「この指とまれ」企画の検討。第7回(10月20日)第38回海外交流の会最終確認、学生料金の設定。「みりの茶会」総括。IAWA報告、松川副会長再任される。第39回、第40回海外交流の会の検討。寺尾会員のセミナーの案内周知。

会員一寺尾信子一講師セミナーご案内

TACOS住宅セミナー「春夏秋冬・気持ちの良い家づくり講座」第4回  
建築家と考える省エネ「我が家のエネルギー・ダイエットをはじめよう!!!」  
日時: 12月2日(土)14:00~15:30 会場: TEPCO 銀座館6階セミナーホール  
12/1までに予約してください。TEL: 03-3590-1300 FAX: 03-3590-2115

編集後記

松蔭村の生き生きした地主さんと、スゴイ生命力の櫻に元気づけられました。自然を愛しく思う気持ちは、人をつなげる力があるんですね。(中野) アートを引き立てている環境。管理運営の重要性を思う。(須永) 妻の人気作品ボトムキンの道路向かいに手入れされた池があった。向かいに住むご老人の作と聞く。(井出) 秋も深まり、法末は冬支度、松陰コンズは櫻の落ち葉の腐葉土化に、せわしくも穏やかな季節。広報委員会は次号の支度。皆様のご意見をお願いします。(渡邊) 見馴れた風景に膨大な手間暇を発見した取材だった。環境はテゴワイ。(編集長 石川)